

# 老舍『蛤藻集』の「悲劇」について

——消えゆく「伝統」——

渡辺武秀\*

## On the “Tragedy” of Lao Shê (老舍)’s “HA TSAO CHI (蛤藻集)”

—— The disappearing “tradition” ——

Takehide WATANABE

### 概论

这次，我想阐明老舍在《老字号》和《断魂枪》中描写的“悲剧”。

两个作品的主人翁有共同的特点，就是都特别珍惜、尊敬和崇拜“传统——即产生于民间的、不朽的、美好的东西”。主人翁在社会上常常看到或是预感到有损害“传统”的名声，名誉的场面。因此，他们很想设法保护这些“传统”。但是，有时候这个“保护”不一定是“保存——即使它永久传下去”。尤其是这个两个作品描写的确实是如此。如果这些“传统”在这个社会继续存在下去，他们肯定会收损害。如果不存在，当然就不会被损害。遇到这样的事情，该怎么办？《断魂枪》的主人翁说，“不传！”。“不传”，既有保护“传统”的意思，因为不传，所以也有灭绝“传统”的意思。而《老字号》的主人翁则是努力保护，但是，还是失去了他所珍惜、尊敬和崇拜的那些“传统”。可以说，两个作品中的主人翁的愿望都是出于“保护”“传统”，但是事情的结果，却是都导致了这些“传统”的灭绝。除此之外，他们也绝对不可能有别的选择，因为他们太珍惜、尊敬和崇拜这些“产生于民间的、不朽的、美好的传统”了

这是一个极不寻常的“悲剧”，这样的社会太悲惨了！。

**Key words** : tragedy, tradition, maintain

今回この小論で取り上げる老舍の短編小説集『蛤藻集』は老舍の短篇集としては三作目で、『趕集』(1934年9月に出版)、『桜花集』(1935年8月に出版)に引き続き、1936年11月に開明書店より出版された。これに収められた作品、初出掲載雑誌名、発表年月日は以下の通りである。(註1)

「老字号」(『新文学』一卷創刊号・1935.4.10)  
「断魂槍」(天津『大公報』「文芸副刊」第13期・1935.9.22) 「聽来的故事」(天津『大公報』「文芸副刊」第151期・1935.5.12) 「新持代的旧悲劇」(『文学』第五卷四号・1935.10.1) 「且説屋里」(開明書店創業十周年紀念集『十年』・1936.7) 「新韓穆列德」(『国聞周報』第一三卷一〇期・1936.3.16) 「哀啓」(『文学』第七卷四号・1936.10.1)

この『蛤藻集』が創られた時期、老舍は青島に住んでいた。1934年夏、齊魯大学から山東大学に移ったことに伴い、同じ山東省の済南から

平成13年12月21日受理

\* 総合教育センター・助教授

青島に引っ越してきたのである。その後、老舎は2年間山東大学に勤めた後、1936年夏に大学を辞め、そのまま青島に住んで作家一本の生活を始めることになる。この1936年には長篇小説二本を発表している。<sup>(註2)</sup> そのうちの一本が後に彼の代表作とされる『駱駝祥子』である。だが、1937年7月7日に蘆溝橋事件が起こり、日本と中国は全面戦争へと突入、これによって青島での老舎の作家一本の生活は終わる。このような環境、このような時期に『蛤藻集』は作られたのである。

老舎の小説はしばしば「ユーモア」という言葉で評される。それは、老舎がもともと「ユーモア」小説といわれるような作品で文壇に登場したことによる。読者を笑わせながら自分の主張をそっと物語に挿入するという形で作品を書いていたのである。<sup>(註3)</sup> ところが、ある時期から「笑い」を全く使わない表現形式で作品を書き始めることになる。このような作品はもはや「ユーモア」という言葉では評することはできないと思われる。その最も早い時期のものは、例えば『趕集』に収められている「微神」(1933.10)という作品であるし、次の年に出版された『桜海集』の「月牙兒」(1935.4)もそうである。<sup>(註4)</sup> もちろんこれらの時期にも「ユーモア」と言われる作品や表現形式が全く消滅しているわけではない<sup>(註5)</sup> が、その一方では老舎は確かに「ユーモア」とは違った方向の作品を生み出す努力をしており、着実にその成果を生み出していたのである。

筆者は、これまでこの老舎の『趕集』や『桜花集』での「新しい試み」を取り上げ、それについて考えてきた。この結果「微神」や「月牙兒」についてはそういったものがいくらか明らかになったのではないかと思う。<sup>(註6)</sup> そこで今回、これまでの成果を踏まえながら、この小論で、この『蛤藻集』に集められた作品の中で「新しい試み」と思われるものを取り上げ、考えてみたいと思っている。

もちろんこの『蛤藻集』の各作品は最初から

統一テーマの下で、後に一冊にまとめることを目論んで書かれたわけではなく、別個の雑誌に発表されたものであるから、それぞれ老舎の、その当時の、時々に関心によって書かれたものには違いない。しかし、この短篇集に掲載された作品を眺めると、その時代や社会環境の中で、やはりその時の特徴、今までにない「新しいもの」を表しているように見える。

この短篇集の作品群の全体を覆っているトーンは「悲劇」である。さらに、その「悲劇」はテーマによって幾つかにまとめることができる。<sup>(註7)</sup> この中に以下のようなものがある。

民間に生まれ、長い時間の中で洗練されたものが、何らかの理由によって新しい時代の中で消え去ってしまうという状況が描かれている。この際、古いもの、伝統的なものが、誰の目から見ても素晴らしいものであればあるほど、これが消滅、断絶せざるを得ない事態は、悲しむべきことであり、一種の国民的悲劇といえることができる。この短篇集には、このようなものを描いた作品がある。或いはまた、これらの作品を「民間に生まれ、長い時間の中で洗練されたもの」を「是」とする視点から見えてくる「悲劇」的世界を描いたものということもできるだろう。

今回は、この「テーマ」を持つ作品を分析し、それに考察を加えてみたい。したがって、ここで取り上げる作品は『老字号』と『断魂槍』である。この考察で、作者は「民間に生まれ、長い時間の中で洗練されたもの」をどのように描き、それを取り囲む社会状況の何が問題になって、それがどのように消滅して行くのかというものを見ていきたいと思う。なお、この考察が、老舎の『趕集』『桜花集』から『蛤藻集』に続く短篇小説の流れ、さらにはこれ以後の創作の流れを明らかにする手がかりになれば幸いである。

## 二

この作品集の最初に置かれているのが『老字号』である。ちなみに作品名となっている「老字号」を翻訳すれば「老舗」ということになる。この老舗の名前は「三合祥」という。主人公はその店の店員の辛徳治という人物である。彼の視点から物語は進行して行く。

また、この作品には二人の全くタイプの違った雇われ店主が登場する。銭店主と周店主である。物語は銭店主が辞め、新しい周店主が店に入ってくるところから始まっている。

銭店主が出ていった後、辛徳治——三合祥の大番頭、現在は責任ある仕事をまかされている——は何日もまともに食事をしてなかった。銭店主は、絹業界公認のベテランであり、まさに三合祥が公認の老舗であるようなものだった。辛徳治は銭店主の下で修行した人物だった。しかし、彼は私的な感情から決してこんなに悲しんでいるのではなく、自分が何らかの野心を持っているのでもなかった。彼はどうしてこんなに恐ろしいのかうまく言えなかった。ただ、まるで銭店主が永遠に取り返すことのできないものを持って行ってしまうかのようなようだったのである。<sup>(註8)</sup>

辛徳治は銭店長を見送る心境をこのように述べている。この部分からもすでに分かるように、作者はこの作品で「永遠に取り返すことのできないもの」が消滅してしまう瞬間を描き出そうとしていると考えられる。

銭店主が辞めることで何が消滅してしまうのか、また銭店主がどうして辞めさせられることになったのかについて以下のような記述がある。

ベテラン、老舗、昔からのきまり——みんな銭店主とともに行ってしまい、或いはもう二度と帰ってこないかもしれない。銭店主は、

あんなに正直で、あんなに厳格なのに、商売で損をしてしまった。店のオーナーは他のことはともかく、ただ年末に利益配分を多くすることを求めたのである。<sup>(註9)</sup>

その銭店主とともに消えて行くものは「老手（ベテラン）、老字号（老舗）、老規矩（昔からのきまり）」であり、辞めさせられた理由は、銭店主が商売で儲けを出すことができなかったからである。ただこうなってしまったのは全て銭店主の個人の責任というのではなく、三合祥は老舗であるので、これまでの老舗の経営法でずっとやってきたけれど、この時代、この社会になって老舗としての商売がうまくいかなかったという部分もあるのである。

では、作者はこの作品で、銭店主の「正直」で「厳格」な老舗の伝統的な経営の仕方はすでに時代遅れで現代には通用しないことを描いているのか。

まず、この物語の背後には、当時の読者であれば誰でも知っている、いわば自明な当時の社会状況があることも知っておく必要があるだろう。当時、中国は関税自主権が奪われており、中国国内に海外の商品が関税なしでストレートに入ってくる事情があった。この作品の中でも、日本を含む海外からの商品の流入による影響を読みとることはできるだろう。その海外商品が従来の国産の商品を凌いでいるのである。外国の安い商品が流入してくるにもかかわらず、それでもなお辛抱強く中国国内の商品を専門的に扱っていたと思われる三合祥のような店には、もともと不利な状況があったのである。<sup>(註10)</sup>

だから、この作品は、単に伝統的な商売法は新しい社会に通用しないという方向でのみ描くのではなく、新しい商売法と伝統的なそれら対比させ、それぞれの商売の特徴を明らかにしたうえで、新しい商売法が利益を上げる状況に何か問題は起きてないか、「正直」「厳格」な伝統的な商売が消滅するということはどういうことを意味しているのか、また、最も根源的なもの

としては、そもそも商売とは一体何なのか、このようなものを問いかけるのである。

では、銭店主が居た頃の店の雰囲気、経営の仕方と周店主のそれはどのようなものであるか。作品の中にそれを見てみよう。

辛徳治の回想という形で、最初に銭店主の場合が紹介されている。

何年間も、三合祥はずーっととてもきちんとしていて、しかも立派で堂々としていた。金の額に黒文字、緑の仕切り板、黒いカウンター、緑の布のカーテン、大きな背もたれのない長椅子には緑の羅紗の被いがしてあり、茶テーブルにはいつも新鮮な花が置かれていた。何年もの間、三合祥には灯籠祭りの時期に大きな赤い房の垂れ下がった四つの灯籠が掛けられている以外には、なんらきまりに合わない馬鹿騒ぎはなかった。何年もの間、三合祥は値引きをしなかったし、おまけをしなかったし、広告を貼ることはなかったし、半月の大売出しもしなかった。三合祥が売っているのは看板だった。何年もの間、店内でタバコを吸うものはいなかったし、大きな声でしゃべるものもいなかった。店内のわずかばかりの音は、ただ銭店主のグルグルという水タバコと咳だけだった。<sup>(#11)</sup>

銭店主の経営は、しばしば「看板を売る」という言葉で表現される。このことは、つまり、商売の根底に、商品の質については看板にかけて保証するという考え方があると思われる。看板に対する自信があるから、値引き、おまけ、広告、大売出しのようなものを一切しないのである。しかも、お茶もタバコも出さないから、店内はいつも静かで清潔な雰囲気を保っている。もちろん、このような店の経営の仕方は、銭店主自身が始めたのではなく、以前から脈々と受け継がれ、伝えられてきたものであると考えて良いだろう。

だが、周店長に替わった途端、三合祥の店の

雰囲気、経営の仕方は一変する。

果たして、周店主は——来て二日も経たないうちに——三合祥をドタバタ劇に改編した。入り口の前には血が滴っているような赤い布を巻き付けたアーチを飾り立てた。「大バーゲン」のそれぞれの字は五尺平方あり、二つのガス灯、それが人の顔を青白く照らしていた。これではまだ足らず、入り口には一団のドラム、トランペットの楽隊が夜明けから夜遅くまで演奏していた。四人の徒弟は、皆赤い帽子をかぶり、入り口、通りで、人を見れば宣伝ビラを渡していた。これでもまだ足らず、彼は二人の徒弟をやって専ら煙草を配らせたり、お茶を手渡ししたりすることをやらせた。おおよそ半尺の白い布を買った者でも、売り場に案内し、煙草も手渡した。兵隊、道路清掃夫、ホステス、みんな煙草を吸い、店の中は煙でお寺のようになった。まだこれでも足らず、一尺買った人に一尺おまけをしたし、そのうえ西洋人形をプレゼントした。店員たちはさらにお客と気ままに話したり笑ったりしなければならなかった。客が買おうとした物が、たとえ店になくとも、客に御座いませんとは言わないで、別の品物を手にとって無理やり客に見せた。もし一〇元の物を買ったら、それを徒弟に運んで行かせた。そのために店に中古の自転車を買った。<sup>(#12)</sup>

銭店主と周店主、二人の商売の仕方は全く対照的である。周店主の経営の仕方は非常にサービス精神旺盛で、大いに宣伝もして、お客にむりやりにでも買ってもらうという対応である。

引用文で描かれている場面からも分かるように、儲けるために、明らかに周店主は銭店主の経営の仕方、つまり三合祥の老舗としての伝統的な経営の仕方を断ち切り、新しい方向へ転換したのである。

また、この作品には三合祥の他に、さらに二軒の店が描かれている。正香村と天成という店

である。三合祥の真向かいにある店が、正香村であり、扱っている品物は三合祥とは別の物である。天成は同じ通りにある店で、同じく絹を扱っている同業者である。天成はまさしく本当の意味での商売敵の位置にある。

まず正香村が描かれている。銭店主が居た頃の、正香村の商売法が以下のように紹介されている。

一年中大売出しをし、いつもガス灯を懸け、いつも蓄音機を回している。二元の品物を買えば、主人が自ら客にミルク飴を食べさせる。食べなくとも相手の口に無理やり押し込んだ！ どういう品物でも一定の価格はなく。銀貨も一定の相場はなかった。……（略）……三合祥とは完全に正反対だった。<sup>(註13)</sup>

以前から正香村はいつも大売出しをし、お客にむしろ過剰なぐらいサービスをしていた。この結果「品物でも一定の価格はなく」「銀貨も一定の相場はない」となっている。三合祥とは、商売法が「正反対」だった。にもかかわらず、「正香村は金を儲け、三合祥は日に日に衰微して行く」<sup>(註14)</sup>のである。

正香村が儲かるのであれば、三合祥も儲けるためには、正香村のような商売法を取らなければならないことになる。そして、もし正香村と同じ商売法をするなら、正香村のようにいつも大売出しをし、「品物でも一定の価格はなく」「銀貨も一定の相場はない」というふうにする必要がある。

さらに、この作品には同業種のライバルも登場する。天成という店である。天成も正香村と同じ商売法を取っている。

天成もこの街の絹店で、店を開いて五、六年になる。しかし銭店主はズーッと彼らとは交わらなかった。天成はわざと三合祥に販売競争をしかけ、しかもそれとなくふっかけ三合祥の店など取り壊さなければならないとし

ていた。銭店主は一声も出さず、ただたまたま一言だけ言った、我々が作っているのは看板なんだと。天成は一年三百六十五日すべて記念日であり、大安売りをしているのである。だが、現在では天成の人たちもマージャンをしにやって来た。<sup>(註15)</sup>

かつては、天成は大売出しをし商品の値引きで三合祥を攻撃していたが、銭店主はそれに動じることなくひたすら従来のやり方で店を経営していたのである。銭店主の言う「看板を作る」がまさにそうである。これについては、すでに述べた通りである。

この老舗の経営法を、周店主は放棄した。だから三合祥と正香村と天成の商売法はみな全く同じになってしまい、さらに店の者同士も仲良しになってしまったのである。この描き方は、まさしく世の中の商店はすべて正香村や天成のような商売法へと流れて行っていることを窺わせている。

この状態を見て、辛徳治は、「三合祥はもう終わってしまった」<sup>(註16)</sup>と心の中で呟く。実際に三合祥の看板は掛けてはいるけれど、もともと老舗の商売法ではなくなっており、店のきまりも、店の様子もすっかり変わってしまったのだから、中身はもうすでに三合祥ではなくなっているのである。これも確かに「店の終わり」方のひとつには違いない。

周店主の商売法は確かにお金は儲かる。だが、果たしてこのような商売の仕方でのいだろうか。そこには何も問題は生じないのか。このことに関わるものが、次の場面に最も深刻な形で提出されているように思う。

一筋が過ぎて、日本製品の検査で大騒ぎになった。ところが周店主は狂ったように日本製品を仕入れた。検査隊がすでに出動していたのに、周店主は日本製品を全部最も目立つところに並べ、命令を下した。「お客が入って来たら、まず日本反物を持ってくるんだよ。他

では敢えて売らないから、絶好の商売のチャンスなんだからね。田舎の人を見たら、はっきりこれは日本製品だと言いなさい。彼らはこれを知っているから。街の人には、ドイツ製品だと言っておきなさい。」と。<sup>(註17)</sup>

所謂「日貨排斥運動」といわれるものである。これは日本の軍事行動にたいする抗議運動である。日本が中国に余りにも非道い行為をするが故に、中国国民は怒り、日本製品をボイコットしたり、焼き捨てたりしたのである。もともとこの運動は国民が自主的に始めたものであるが、この作品にあるように、この運動の効果を上げるために、また、国民みんなが足並みを乱さないように、検査隊のようなものが組織され、日本製を売ってないか検査をしていたようである。決して警察による取り締まりという類のものではないと考えるべきであろう。

物語では、実際に検査隊が検査を始めることになる。その検査隊と周店主のやりとりが次の文章である。

検査隊がやって来た。周店主は顔に何本かの笑い皺を作ってニコニコしていた。煙草を勧め、お茶を勧めた。「三合祥、この三文字に誓って、ここは日本製品を売るところではありません。だから！みなさん、ご覧下さい！入り口の処にはドイツの布もありますし、手織の綿布もあります。売り場のカウンターにあるのはみな国産の絹物です。私どもの店には南方にチェーンストアがあり、自分で作り自分で運んでおります。/検査隊は花柄模様  
の布を疑った。周店主は笑った。「張福来、奥に残して置いたあの日本の布を持ってきなさい。/布が来た。彼は検査隊の隊長を引っ張って「隊長さん、ほんとのところ、ただこの布地だけを残していたんです。これは隊長さんが着ていらっしゃる外套と同じ生地のもですよね。だから！」と言い、振り向いて「福来、往来に捨ててこい！」と言った。/隊長は

自分の外套を見ながら頭も上げず出て行った。/このドイツ製になったり、国産になったり、英国製になったりする日本製布で大儲けをした。<sup>(註18)</sup>

周店主はこの検査隊の人がまさかと思うような商品の配置をして「誤魔化し」たり、さらには相手が専門的な知識を持っていないことを利用したりして「騙す」。そうして、「日貨排斥運動」で品物がだぶついている日本製品を相当に安く仕入れ、それを売って大儲けをしたと考えられる。

この場面の理解には、当時の中国人は、この場面を読み、周店主の商売の仕方によどのような印象を持つだろうかということを考える必要がある。当時の中国人の読者は当時の日本の軍事行動を許せないのと同じように、周店主の、この商売法を「許せない」はずである。というのは、周店主の商売方法は、突き詰めれば日本の侵略行為に加担しているようなものなのだからである。つまり、国を売っている行為なのである。

しかし金儲けという点から考えれば、「日貨排斥運動」をもし利用できるのであれば、或いは利用できる才能があれば、確かに儲けるには手っ取り早く、効率も良いのである。これがまさしく周店主流の商売なのである。

このような周店主の商売の仕方に対し、辛徳治は以下のような感想を述べている。

辛徳治ははっきり分かった。商売をしてお金を儲けたいと思ったら、手品を使うことができなければならないし、漫才をすることができなければならない。周店主は人物である。しかし、辛徳治はここでこれ以上仕事をしなかつた。彼は周店主に感心すればするほど、心の中はますます悲しくなつた。彼はご飯が喉を通らなかつた。安らかに寝ろうと思えば、彼はこのような三合祥を出て行かねばならなかつた。<sup>(註19)</sup>

もう言うまでもないが、「手品を使う」「漫才をする」とは、相手に応じて「騙し」たり「誤魔化し」たりするということであり、周店主は、この種の才能が優れているのである。だが、周店主のこの商売法には「良心」といわれるようなものが欠けている。だから、「良心」を持っているものは周店主と一緒にやっていけないのである。辛徳治は「良心」があるから「ご飯が喉を通らない」し、「安らかに寝られない」のである。こうだとすれば、辛徳治はこの三合祥を去っていくしかない。

また、ここに来て、三合祥が長いことかかって築き上げた名声、評判、信用は、これから最も遠い、しかも恥ずべき周店主の商売によって、あっと言う間に崩れ去ってしまったということもできる。もしこの事実が知れ渡れば、恐らく誰も三合祥を信じることはないだろう。まさに、信用という点からすれば、三合祥は完全に「終わった」のである。

だが、意外にも、この三合祥を出て行ったのは辛徳治ではなく、周店主の方だった。天成が周店主を引っこ抜いたのである。一方、三合祥の辛徳治は店のオーナーを説得して、銭店主を呼び戻すことに成功する。

実は、この展開によってもう一つの三合祥の「終わり」方を示すことになるのである。

銭店主が帰ってきたら、一切はみな帰ってくる。三合祥は必ずや「むかし」の三合祥になる。もしそうでなければ何にもならない。彼はもう考えていた。ガス灯、太鼓ラッパ、広告、ピラ、煙草をなくす。もしどうにならなくなったときには、人を減らせばよい。恐らくそれで出費を抑えることができる。しかも声は出さず、安売りをする。計測を多めにし、品物は本物とするのである。まさか人々はみんなみんな目が見えないというわけではあるまい。/銭店主は果たして帰ってきた。街にはただ正香村のガス灯だけが残った。三合祥は昔日の静粛さを取り戻した。銭店主を歓迎す

るために、あの四つの灯籠、それもあの大きな房のついたものが懸けられてはいたけれど。<sup>(註20)</sup>

三合祥も三合祥流の安売りをしている。品物は本物であり、いくらか多めに計測をしてサービスする。しかしこれは大々的に宣伝するのではなく、そっと「善意」「誠意」を忍び込ませているのである。これが老舗の商売法なのだ。だが皮肉なことに、これは本当に品物が見分けられる人にしか分からないのである。結局、この店にはお客はなかなか入って来なかった。

ところが一方、天成の方はこれまで以上に奇抜な客寄せの方法を考え、店は押すな押すなの人だけりとなる。

三合祥に灯籠が懸けられたその日、天成の正面の入り口には二匹の駱駝がおかれていた。駱駝の身体にはいろんな色の帯状の絹がいっぱい懸けられ、駱駝のこぶの上には点滅する電灯があった。駱駝の左右にはくじを引くところが設けられていた。一人一毛、十人集まると、くじの当選番号が発表された。一毛のお金でモダンな絹を得るチャンスがあった。天成の入り口の外は縁日みたいになり、身動きのとれないぐらい人がいた。本当にニコニコと嬉しそうに一反のモダンな絹を脇に挟んでいる人がいたのだ。<sup>(註21)</sup>

客は天成に行き、三合祥に行くことはなかった。天成のこの客寄せの方法は、やはり、うまく人間の弱点を利用している。人間というものはたった一毛で絹を買うことができるという甘い言葉に抗することはできないのである。つまり人々は表面の品物の安さに目を奪われて、その中に仕掛けられた罠を見抜くことはできないのである。

一節が過ぎ去って、三合祥は人を減らさなければならなくなった。辛徳治は涙をためて

銭店主に「私が一人で五人分の仕事をします、恐れることはありません」と言い、老店主も「恐れることはない!」と言った。辛徳治はその晩ぐっすり眠った。次の日五人分の仕事をするためだった。/しかし、一年経って、三合祥は天成に潰された。<sup>(註22)</sup>

この物語はこのように終わる。ここにおいて、三合祥という店の名前は、この世から完全に姿を消したのである。

長々と作品を分析してきたのだが、この中で、特にこの作品の、三合祥の二つの「終わり」方に注目したい。これをもう一度簡単にまとめると、次のようになると思われる。<sup>(註23)</sup>

- ① 三合祥の店も名前も残るが、実際の中身は三合祥ではなくなっている。
- ② 中身は三合祥のままだが、三合祥の名前も店もすべて無くなってしまう。

どちらにしても三合祥は、結局は「終わり」にはなるけれど、じつはこの二つの終わり方には大きな違いがある。それを改めて整理すれば以下のようなになる。

① の場合は、店が潰れないために、正香村や天成のような商売法を取り入れるということである。もともと三合祥は「正直」「厳格」な商売法だった。ところが正香村や天成は「欺き」「誤魔化し」を含む商売法である。だが、正香村や天成は儲かっている。だから、三合祥が生き残るためには、正香村や天成のような商売をしなければならないことになる。これは、「正直」「厳格」を捨てて「欺き」「誤魔化し」を受け入れるということでもある。

② の場合は、正香村や天成のような商売法を拒否することである。つまり、例えば「正直」「厳格」或いは「信用」「善意」ということで表すことのできる、老舗の根本精神を守り抜こうとするものである。しかし、商売は振るわない。

さらに、三合祥という店そのものが長いことかかって獲得した信用、名声、評判といったものがあるわけだが、これを前述に加えて考える

と、この二つの「終わり」には、

① の場合、商売法に「欺き」「誤魔化し」があるが故に、三合祥の信用、名声、評判といったものは、徹底的に汚されながらも、店は生き残って行くことになる。

② の場合、商売法に「欺き」「誤魔化し」を拒否するが故に、三合祥の信用、名声、評判は保たれたままで、店は消滅して行くことになる、という違いもあることにも気がつく。

このように整理すると、この三合祥の終わり方に込められた作者の考え方が見えてくる。この整理の結果、この作品の主人公辛徳治を通じて、作者が選択したのは、②であることが分かる。つまり、この選択は、どうせ三合祥が「終わる」ものなら、信用、名声、評判を汚されてまで存続させるより、それが保たれたままで、完全にこの世から消滅させる方がよい、という作者の考え方に基づいたものであることになる。

ただ、この際、辛徳治という人物からすれば、決して三合祥を「終わらせよう」として②の場合を選んだわけではなく、あくまで老舗としての三合祥が永遠の生き残ることを願ってこの道を選んだのである。にもかかわらず、彼が選択したものが、三合祥を終わらせるというところに直結してしまうという悲しい矛盾が生じてしまうことである。この点がこの作品をさらに「悲劇」的なものにしていく。

ともあれ、老舗としての三合祥が潰れたということは、同時に社会の人々が三合祥の「正直」「厳格」さ、その背後にある「善意」「真心」を理解することができなかったということでもある。ということは、「正直」「厳格」が受け入れられ、「善意」「真心」が理解できるという社会にしか三合祥は存在することができないということでもある。

### 三

さらに、この問題は『断魂槍』という短い作品でも触れられる。同様に中国の伝統的なもの



であり、価値のあるもの、磨き抜かれ、鍛え抜かれたものが消滅して行くという実情が描き出されている。

まず『断魂槍』の冒頭の部分を見てみよう。

沙子龍の鑊局ビヤオジーはすでに安宿に変わっていた。/東方の大いなる夢は醒めないわけにはいかなかった。大砲の音がマレーシアやインドの虎のうなり声を圧していた。半ば目を覚ました人は、目をこすりながら、祖先や神に祈った。だが、間もなく、国土、自由と主権を失ってしまった。ドアの外には顔の色の違う人が立っており、銃口はまだ熱かった。彼等の長い槍、毒矢、蛇の模様をついた厚い盾は何の役にも立たなかった。龍の旗の中国も二度と神秘的ではあり得なかった。列車が出現し、墓を突き進み風水を破壊した。杏色の多くの房のついた鑊旗、緑の鮫皮製柄の鋼刀、連なった鈴を鳴らす張家口ジャンジャコーの馬、江湖ジャンフの知恵と物騒な話、義気と名声、また沙子龍、彼の武芸、事業さえも夢のごとく昨日のものに変わってしまった。今日は汽車、機関銃、通商と恐怖である。聞くところによると、皇帝の首を切り落とそうとしている人がいるそうだ。/これは鑊局では既にご飯が食べられなくなり、国技がまだ革命党や教育家に提唱されない頃のことである。<sup>(註24)</sup>

ここに、この物語の時代背景が書かれている。中国に西洋から武力を伴う文化が凄まじい勢いで中国に押し寄せてきている。彼等の武器は大砲、機関銃などといった圧倒的な破壊力のあるものだった。だから、とても槍と、弓とかでそれに太刀打ちできるものではない。こういった情報が読み取れる。ところで、沙子龍が営んでいた「鑊局」というのは、直訳すれば、運送業ということになるが、実は、品物を運送する際には、それを狙う盗賊の襲撃といった危険が絶えず伴うので、それは単なる運送業ではなく、人夫の他に武芸集団をも抱えた組織であると考え

たほうがよい。

また、作品の主人公の沙子龍や彼の「五虎断魂槍」という武芸の「技」については以下のように述べられている。

ただ夜にだけ、彼は建物の一番奥の小さな庭を閉め切り、彼の「五虎断魂槍」をしっかり練習した。この技は、二十年間の間、西北一带に、彼のために「神槍沙子龍」という五文字を創りだし、敵に遭遇させることはなかった。だが、現在、この技が二度と彼のために栄光を増し、勝利をもたらしてくれるはずはなかった。ただ、この、ひんやりとして、滑らかで、硬くて、振るえている槍身を撫でて、心を少し悲しくさせるだけだった。ただ夜中に一人で槍を持ってはじめて、自分がまだ「神槍の沙」であることを信じていることができるだけだった。昼間は、彼は余り武芸や往事のことを話さなかった。彼の世界はすでに強風に吹き飛ばされていた。<sup>(註25)</sup>

沙子龍は以前、類い希な「五虎断魂槍」という「技」を持ち、西北一带の武芸界に君臨した人物だったのである。また、「ひんやりとして、滑らかで、硬くて、振るえている槍身を撫でて」いる様子に、沙子龍の、この「五虎断魂槍」に対する並々ならぬ「愛情」、「大切さ」を感じることができる。

だが、この部分では、どうして「夜」にだけ、しかも誰も見てないところで「五虎断魂槍」を練習するのか、或いは「昼間は、彼は余り武芸や往事のことを話さなかった」のか、こういう点が謎として残される。

この種の武芸を取り巻く状況は決して良くはない。このことは以下のように紹介されている

彼が手元で鍛えた少年たちはまだいつも彼のところに来た。彼等のほとんどは落ち着く先がなかった。みなかなりの武芸の腕はあったが、使うところはなかった。あるものは廟

で武芸を売る商売していた。二回足を交互に振り上げ、武器を使って見せ、何回かとんぼ返りをし、それに加えて大力丸だいきりがんという薬を売り、小銭を稼いだ。あるものは実際に忙しかった、果物かごをぶら下げたり、或いは枝豆を担いで、朝早くから街で一斤いくらと売り歩いた。<sup>(註26)</sup>

武芸を志す若者たちが、沙子龍のもとに集まってくる。沙子龍は幾らか生活の面倒も見ているのだろう。しかし、彼らはもっぱら武芸を庶民に見せ、それでお金を稼いで生活したり、またある者は天秤棒で品物を担ぎ、売り歩いているのである。

まず、このような現状が紹介された後で、この作品の物語が始まる。沙子龍の一番弟子と称する王三勝が土地廟で自分の武芸の技を聴衆に見せ、お金を稼いでいる場面である。

王三勝が自分の武芸の「技」を演じ終わったところへ、見るからに貧相な、しかも足を引きずって歩く癖を持つ、孫という武芸者が登場し、王三勝と戦うことになる。王三勝の「技」も凄いが、孫という武芸者はもっと「技」が優れていた。この勝負に、あつと言う間に王三勝は負けてしまう。しかし負けっ放しでは余りに悔しい。かつての英雄、沙子龍なら勝てるかも知れない。まして王三勝は沙子龍の一番弟子を自認している。だから自分のためであれば、必ずや沙子龍は仇をとってくれるはずである。こう考えて、王三勝は沙子龍のところに孫という武芸者を連れて行くことにする。一方、孫という武芸者ももちろん沙子龍の名前を知っている。もともと武芸者は相手が一流の「技」を持っているほど、その「技」に興味を持ち、戦うことを強く望むものである。だからこそ武芸者なのだ。孫老人は王三勝についていった。

西北一帯で名を馳せた武芸の達人の沙子龍と、あつと言う間に王三勝をやっつけた孫老人の戦いが始まる。この作品では、次の場面が最大の山場である。この部分をいささか細かく見

てみよう。

客が入ってきた。沙子龍は応接間で待っていた。お互いに挨拶をして座わり、三勝にお茶を入れに行かせた。三勝は二人の老人がすぐに戦いはじめることを願ったが、お茶を入れに行かないわけにもいかなかった。孫老人は何も言わず、深くくぼんだ眼で沙子龍を押し量った。沙子龍はとでもへりくだって言った、/「もし三勝があなたに失礼なことをしたのであれば、どうか彼を許してやって下さいませんか、まだ若いですから。」と。孫老人は少し失望した。だが、沙子龍の聡明さも見て取った。彼はどう対応したら良いか分からなかったが、人物の聡明さで武芸を断定することはできない。「槍のご指導をお願いしたい」彼は思わず言葉を発した。<sup>(註27)</sup>

沙子龍の対応の仕方は悪くない。しかし、武芸者の関心はやはり、かつてこの一帯に名を馳せた沙子龍の「技」がどんなふうなのかというところにある。だから孫老人は敢えて挑戦しているのである。だが、沙子龍の反応は意外なものだった。

沙子龍はその言葉に答えなかった。王三勝は急須を持って入ってきた——二人の戦いを見たいがために急ぎ、水が沸騰しているかどうかはかまわず茶を入れてきたのだった。/「三勝」沙子龍は茶碗を持ち上げ、「小順たちのところへ行け、天匯で会おう。孫老人と食事をするのだ。」「何ですって！」王三勝の目玉はこぼれ落ちそうになった。沙先生の顔をちらっと見て、怒ったけれど、怒りを言葉にせず、「はい！」と言って出ていった。唇を大きく突きだし不満顔をしていた。<sup>(註28)</sup>

明らかに沙子龍は戦いを逃げようとしている。少なくとも王三勝にすれば、自分のためだったら戦ってくれるという期待は裏切られたので

ある。ちなみに文脈から考えると、「一緒にご飯を食べる」というのは戦いの後の仲直りのようなもので、しばしば負けたものがご飯をおごるという形になると思われる。だから沙子龍は、戦わないで負けた者の態度で孫老人に應對しようとしているのである。もし挑戦者が単に勝敗だけにこだわるのならば、もし沙子龍に勝ったという事実だけが欲しければ、ここで終わるはずであった。

だが、孫老人はそのような人物ではなかった。「ご飯を食べよう」と繰り返す沙子龍に、孫老人は勝負することをさらに迫る。孫老人は武芸の道を追求している立派な武芸家なのである。

「わしは槍の使い方を教えてもらうために来たのだ。」「武術はもうとっくに止めました、」沙子龍は身体を指した。「しかももう贅肉だってついてしまいました。」「じゃ、こんなふうではどうじゃろう、」孫老人は深く沙先生目を見て言った。「戦うのではなく、わしにあの五虎断魂槍を教えてくれないか。」「五虎断魂槍ですって？」沙子龍は笑った。「とっくに忘れてしまいました。もうすっかり忘れてしまったのです。どうですか？ 私のところにお泊まりになって、あちこち見物されては。お帰りの時には少しばかりの路銀を差し上げましょう。」「見物もしないし、金だって要らない。わしは武芸を学びに来たのだ！」孫老人は立ち上がった。「わしの武芸をあなたにお見せしよう。それで、わしが武芸を学ぶ資格があるかどうか見ていただこう！」<sup>(註29)</sup>

こう言って、孫老人は自分の素晴らしい「技」を沙子龍の前で披露する。ここでさらに、彼の目的がまさしく真に武芸の追求にあること、しかも彼が身につけている「技」も一流であることが明らかになる。このような一流の武人だからこそ、敢えて自分の「技」を見せてまで、繰り返し沙子龍に「技」を覚えてくれるように頼んでいるのである。

本当の武芸家であれば、このような人物の気持ちが分かるだろうし、それに答えるのが礼儀というものである。孫老人は、沙子龍が真の武芸者であるという部分を頼みに、返答を迫っているのである。もう、沙子龍はこれ以上言い逃れをすることができない。

「わしにあの技を教えてくれないか！」孫老人は拳を組んで挨拶した。沙子龍も階段を下りて、拳を組んで挨拶をしながら、「孫老人、本当のことを申しますと、あの技は私と棺桶に入ります、一緒に棺桶に入るんです！」「伝えないのか？」「伝えません！」「孫老人の鬚の口は長いこと動いたが、何も言いはしなかった。部屋に帰り藍色の木綿の上着を取り上げると、足を引きずって歩きながら言った。「騒がせた、また会おう！」<sup>(註30)</sup>

やはり「教えない」であった。その理由が、沙子龍の「技」は沙子龍と「一緒に棺桶に入る」ということであり、「伝えない」ということなのである。文脈から考えると「伝えない」というのは「技」を誰かに教授しないばかりか、その「技」を使って誰かと戦うこともしないし、その「技」を誰かに見せることもしないということである。ここに来て、冒頭の部分で、何故沙子龍が庭を閉め切り、「五虎断魂槍」を練習していたのかの理由も明らかになる。

結局、この沙子龍の「伝えない」という言葉に孫老人は沙子龍の「技」を見ることを断念する。

「ご飯を食べて行って下さい！」沙子龍は言った。孫老人は返事をしなかった。沙子龍は客人を入り口まで送り、その後で部屋に帰り、壁の隅に立っている大きな槍に向かってちょっと頷いた。彼は一人で天匯に行った。王三勝たちがそこに待っているのを心配したからだ。彼らはみんな行ってはいなかった。<sup>(註31)</sup>

孫老人は去り、以後、王三勝も二度と沙子龍のところに姿を見せることはなかった。

そして、最後は以下の記述で終わる。

夜は静かになり人もいなくなった。沙子龍は小さなドアを閉め、一気に六十四の槍の型をやりおえた。その後、槍を地面について、天上の群星を眺め、当時の荒野の宿、荒れた林における威風ぶりを思い出した。ひとつため息をつく、手の指でゆっくり冷たくて滑らかな槍身をさすり、又微かにちょっと笑った。「伝えない！ 伝えないぞ！」<sup>(註32)</sup>

「伝えない」ことで、沙子龍自身とともに「五虎断魂槍」もこの世から消えて行く。この「伝えない」は、もちろん他の人に「五虎断魂槍」を渡さないという自分勝手な気持ちではなく、やはり沙子龍の、「五虎断魂槍」を守り通したいという気持ちから出たものであると考えるべきであろう。

沙子龍が「五虎断魂槍」をどのようなものと考えているのかについては、「手の指でゆっくり冷たくて滑らかな槍身をさすり」からも窺えるだろう。このような描写はこの作品の冒頭にもある。沙子龍のこの「槍をさする」動作に「五虎断魂槍」の大切さ、それに対する愛おしさのようなものが滲み出ている。この「技」は、沙子龍が自分の宝物のように、とても大切にしているものなのである。

この「五虎断魂槍」に対する思いと「伝えない」という気持ちとは大いに関係がある。

この作品では沙子龍自身がどういう理由から自分の技を「伝えない」と決心したのかを述べることはない。ただ沙子龍は自分の「技」を「伝えない」という決心を表明するだけである。

だが、作品ですで見たとおり「伝えない」のは「伝える」ことより遥かに辛いことである。天下無敵の「技」であるから、挑戦され、それを受ければ称賛を受ける可能性が高い。たとえ戦わなくとも「技」を教えれば、きっと相手に感

謝されるだろう。そうすれば、武芸者どおしの友情も生まれるかもしれない。だがそれをしないのである。この結果、沙子龍はこの高度な「技」を持ちながら、孫老人のような一流の武芸者には失望され、自分が獲得していた誇り、嘗ての栄光、名声も失い、さらには自分を慕ってきた若者も彼のもとを去って行くのである。

では、何故このような多くのものを犠牲にしてまで、「伝えない」ことを選んだのか。それは、「伝える」ことで失い、「伝えない」ことで守れるものがあるからである。多くのものを犠牲にしても、むしろ「伝えない」ことで守ることの方が沙子龍にとって重要であると考えているからである。

では、その守りたいものとは何か。それは「五虎断魂槍」という「技」そのものが長いことかかって獲得した誇り、栄光、名誉というものであると考えたい。これは沙子龍自身が獲得しているものとは別物なのである。これを、沙子龍は守ろうとしているのである。これを守るために「伝えてはならない」と沙子龍は判断したのである。だが、皮肉なことに、この「五虎断魂槍」を守るためには、沙子龍自身の誇り、栄光、名誉を犠牲にしなければならない。

沙子龍の「五虎断魂槍」を守ろうとして、自分の誇り、栄光、名誉を犠牲にしたのである。その「技」も素晴らしいものであるが、われわれは、それを守ろうとする沙子龍の気持ちにも心打たれる。われわれがこのような沙子龍の気持ちを本当に理解できたとき、沙子龍や彼の「技」の消滅を惜しむわれわれの気持ちはさらに大きくなる。この気持ちが大きければ大きいほど沙子龍や彼の「技」を消滅させるものに対するわれわれの憤りも大きいのではないか。

結局、沙子龍や「五虎断魂槍」を消滅させたものは何だったのか。何が沙子龍に「伝えない」と決心させたのか。沙子龍の口でこのことが語られることはない。ただ、その社会状況の中で「伝え」れば、「五虎断魂槍」の誇り、栄光、名誉を汚すと沙子龍に思わせたものがあったこと

は事実である。これらが具体的に何であるのかは分からない。暗示はされている。それは、物語の冒頭で紹介されている中国に土足で踏み込んでくる外国勢力、それから引き起こされる様々な社会の動き、特に武芸者が武芸者として生きて行くことのできない社会状況といったものであろう。これらが沙子龍の目にほぼ絶望的なものとして映っていたのである。

#### 四

『老字号』と『断魂槍』という作品の分析、考察の結果、二つの作品がほとんど同じ方向で書かれていること、また、二つの作品のそれぞれのテーマが、それぞれ重なり合い、互いに補い合っていることが明らかになったのではない。

この考察をひとつにまとめると以下のようになると思う。

1. 作者は、登場人物を通して「民間に生まれ、長い時間の中で洗練されたもの」（以下ではこれを「伝統」と呼ぶ）を描き切っている。『老字号』の辛徳治は三合祥の商売法、その背後にある伝統的な精神——これらを三合祥の看板と表現して良いだろう——を誇りに思い、大事にしており、それを守ろうとしている。『断魂槍』の沙子龍は嘗て自分が創りだした「五虎断魂槍」を愛おしく思い、大事にしている。この登場人物の気持ちの強さが、三合祥の店の風格、商売法を、或いは沙子龍の「五虎断魂槍」を素晴らしいものと読者に思わせるのである。
2. どちらの作品でも「伝統」を取り囲む社会状況には問題がひそんでいる。『老字号』の場合、三合祥の「正直」「厳格」な商売を捨て、その商売の背後にある「善意」「真心」を理解できない人々で構成されている社会であるし、『断魂槍』の社会は沙子龍が「五虎断魂槍」を「伝えられない」と

判断した社会である。このような社会であるいはもしかしたら病気を抱えた社会と呼んで良いものかもしれない。

3. この社会で生き残るとすれば、「伝統」の評判、名声、誇りは汚される。『老字号』における三合祥は、実際に、大売り出し、値引き、宣伝を派手に行わなければならないのである。ただしそれをすれば、そこに「誤魔化し」とか、「欺く」とかいうものが入り込んでくる。これは老舗の「信用」とは相反するものである。また『断魂槍』には「五虎断魂槍」を「伝えれば」どのようになるのか具体的には書かれていない。ただ幾つかの場面から「五虎断魂槍」は、沙子龍のもとに集まっている若い武芸者の例からもわかるように、必ずや廟での見せ物になることが確実に予想される。
4. だから、三合祥の看板や「五虎断魂槍」の、かつての誇り、名声、評判を守るために残された道は、結局、後世に「伝えない」であり、誰かの手で消滅させてやるしかないのである。
5. では、誰が消滅させるかである。それは、「伝統」を最も理解し、最も誇りに思い、最も大切に思い、その存在を永遠に願う人物である。『老字号』ではそういう人物が辛徳治である。辛徳治が、三合祥が「潰れる」道を選択し、三合祥と運命をともにすることになる。『断魂槍』では沙子龍であり、自分とともにその「五虎断魂槍」は棺桶に入り、消えて行くのである。
6. そして、これらの『老字号』と『断魂槍』の「悲劇」については、以下のように言うことができるのではないか。これらの作品の「悲劇」は、ただ単に「伝統」がこの世から消滅してしまうところにだけに存在しているのではなく、「伝統」を最も理解し、誇りに思い、それを最も大切に思い、その存在を永遠に願う人物の、「伝統」

を汚されないように守るという行為が、却って「伝統」を消滅させることになってしまうということを引き起こしてしまうところに存在しているのである。<sup>(註33)</sup>

## 結 語

今回は『蛤藻集』収録されている『老字号』『断魂槍』を考えた。今回の考察で、この作品で、老舎が何を描き、何を表明しようとしているかが、いくらかははっきりしたのではないと思われる。

これらの作品の基本的な構造は、これまで考察した『微神』、『月牙兒』と共通していると思われる。これまで老舎の作品は、その作品の核の部分に、たとえば『微神』などでは男女の間に生まれた「愛」を使っていたし、また『月牙兒』はその主人公の「恐るべき人の良さ」というものを使っていた。<sup>(註34)</sup>そして、これらの老舎の作品の作り方を、以前、筆者は「老舎はこのような「絶対的善」のようなものを持つ人物を、社会に放り込んで社会や人間を眺めたとき、そこに人間や社会の何が見えるのかという方法で、作品を創作しているのだと考えることができるのではないか。」<sup>(註35)</sup>と述べたことがある。この『老字号』『断魂槍』の場合はその「絶対的善」のようなものが「民間に生まれ、長い時間の中で洗練されたもの」（ここではこれを「伝統」と呼んでいる）ではないかと考える。ちなみに「伝統」というのは、具体的には、すでに作品で見たように、『老字号』では老舗が持っている伝統的な商売法、その精神、或いは店構えといったもの、『断魂槍』では、沙子龍の「五虎断魂槍」である。

ただ、「伝統」は「愛」や「人の良さ」と全く同じではない。これらの「愛」とか「人の良さ」と比べると、「老舗」「武芸」といたものは、或いは「老舗」と「武芸」の間においても、その理解の仕方には、やはり個人差が出てくるもののように思える。また或いは、本来の意味の「伝

統」というものに関わるので、読者が中国人であるか、外国人であるかでも理解の差が出てくるかもしれない。この点で「伝統的な素晴らしいもの」を「絶対的善」として読者に納得させるのは「愛」や「人の良さ」より、いくらか難しいと思われる。

だから、これらの作品では、そういう「伝統」を理解できる、或いはそのことを説明すればきつと理解できる読み手が必要であるということも言える。だとすれば、老舎がこの作品を書いたということは、老舎はこのような読者が、この当時の中国社会に多く存在していると考えていたことになるのではないか。もしかしたら、当時の中国社会に伝統的なものを見直そうという気分が出ていたのかかもしれない。

ただ、はっきりしているのは、老舎が中国社会の「伝統」に目を向けようとする姿勢があって、そういう方向で作品を創りだしているということであり、もしかしたら、このような姿勢が、後の大長編小説『四世同堂』を生み出すことになるのかかもしれない。(完)

## 【注】

テキストとしては『老舎全集7』（人民文学出版社）に収められているものを使った。したがって、この【注】のページは、この本のものである。今回取り上げている作品は、例えば『老舎文集8』（人民文学出版社）でも見ることができる。さらに『中国現当代著名作家文庫 老舎代表作』（黄河文芸出版社・1986）には『断魂槍』『老字号』が入っており、『中国現代作家選集 老舎』（三聯書店（香港）有限公司・1988）には『断魂槍』が収められ、『老舎小説経典 第四巻』（九州図書出版社・1995）には『老字号』が採録されている。また、『蛤藻集』については『開明文庫 第二輯 蛤藻集 老舎著』（開明出版社・1994）という、恐らく当時と同じ体裁であろうものがある。もちろん字は簡体字である。なお、日本語の翻訳では、『老舎小説全集6巻』（学習研究社・1981）に『断魂槍』『老舗』という題で竹中伸氏のもの掲載されている。

(1) この部分の資料として日下恒夫著「老舎年譜」（『老舎小説全集10 四世同堂（下）』学習研究社・1983）張桂興編著『老舎資料考釈（下冊）』（中国国際廣播出版社・1998）を使った。ただ、『断魂槍』と「聴来的故事」の掲載雑誌の号数が

違っている。日下恒夫氏の「老舎年譜」では「断魂槍」（天津『大公報』九月二二日「文芸副刊」151期）「聴来的故事」（天津『大公報』「文芸副刊」第15期）となっており、一方、張桂興編著『老舎資料考釈』では「断魂槍」（天津『大公報』「文芸副刊」第13期・1935.9.22）「聴来的故事」（天津『大公報』「文芸副刊」第151期・1935.5.12）となっている。調査が必要だが、張桂興のものが、時期が新しいということで、今回は取りあえずこちらを採用した。

- (2) 9月より『駱駝祥子』は『宇宙風』という雑誌で連載が始まり10月より『選民』が『論語』という雑誌で連載が始まった。なお『選民』は単行本になる際に、『文博士』と改題されている。
- (3) 老舎は『老張的哲学』（1926）で文壇登場した。さらに続けて『趙子曰』（1927）『二馬』（1929）を『小説月報』という雑誌に発表する。これらの作品は、文学史でしばしば「ユーモア小説」と評される。なおこのことに関しては、◎拙論「老舎『老張的哲学』私論」（『集刊東洋学』57号 pp. 101-119）◎拙論「各種の老舎論——「ユーモア」評価をめぐって——」（『集刊東洋学』60号 pp. 126-133）◎拙論「老舎『趙子曰』試論」八戸工業大学紀要第9巻 pp. 187-197◎拙論「老舎『二馬』試論」（『八戸工業大学紀要』第10巻 pp. 205-214）を参照していただきたい。
- (4) この点については以下の論文を参照していただきたい。◎「老舎『微神』試論」（『八戸工業大学紀要』第19巻 pp. 169-181）◎老舎『月牙児』試論」（『八戸工業大学紀要』第20巻 pp. 133-143）
- (5) どういうものを「ユーモア」というのか依然として難しい問題はあがあるが、ただこの時期にも、「ユーモア」を旨とする雑誌である『論語』に、老舎は作品をしばしば発表しており、「ユーモア」に対する興味を依然として持ち続けていたと思われる。
- (6) この文の考察については注(4)の論文で行っている。
- (7) 『蛤藻集』の作品群をテーマ別に三つに分けて考えている。その三つは以下の通りである。
  - (i) この作品集には、民間に生まれ、長い時間の中で洗練されたもの、或いは古き良きもの、伝統的な技、このようなものが、何らかの理由によって新しい時代の中で消え去ってしまうという状況が描かれている。例えば『老字号』或いは『断魂槍』にそれが色濃く現れていると思われる。この際、古いもの、伝統的なものが、誰の目から見ても素晴らしいものであればあるほど、その消滅、断絶せざるを得ない事態は、悲しむべきことであり、一種の国民的悲劇ということができると思われる。また、『新韓穆

列徳』という作品も、いくらか表現の角度は違うが、物語の内容が伝統的な商売法に関わるのでここに入れてもよいと思われる。

- (ii) 二つ目は、その裏返しの状態である。やはり古いものと新しいもの、伝統的なものと新しい時代のものという対比の中で、今度は古きもの、伝統的なものの中に存在していた悪しきものは当然新しい時代では消滅させるべきものであるにも拘らず、それが現在においてもなお残り続け、そのことによって社会の発展を停滞させ、人を不幸にしているという現象である。『新時代的旧悲劇』或いは『且説屋里』という作品がこれに当たると思われる。
  - (iii) その他、『徳来的故事』と『哀啓』という作品は、この作品集にあっては、幾らか異色のような印象を受ける。『聴来的故事』の物語は何もできない、何もしない、何の能力もない、ただ笑っているだけ、このような人物がしだいに社会的に高い地位に上がっていくというものである。この作品は、或いは(2)に入るべきかもしれない。また、『哀啓』では車夫を登場させている。この車夫の一人息子がならず者たちに拉致されて、車夫の目の前で残酷な形で殺されてしまう。このならず者たちの行為に日本の中国侵略のそれを連想させる。
 

今回はこのうち(i)を取り上げたのだが、『新韓穆列徳』はテーマを裏側から扱っているので考察から除外した。ともかく、紙幅の都合もあり、他の作品については、いずれ別の機会に論じたい。
- (8) 『老字号』 p. 321
  - (9) 『老字号』 同上
  - (10) 『蛤藻集』の中の「新韓穆列徳」という作品に、やはり古い歴史を持つ店が出てくるのだが、この店の倒れてゆく原因に外国製品の流入の影響を読み取ることができる。
  - (11) 『老字号』 p. 321
  - (12) 『老字号』 p. 322
  - (13) 『老字号』 p. 323
  - (14) 『老字号』 同上
  - (15) 『老字号』 p. 324
  - (16) 『老字号』 同上
  - (17) 『老字号』 p. 325
  - (18) 『老字号』 同上
  - (19) 『老字号』 同上
  - (20) 『老字号』 p. 326
  - (21) 『老字号』 同上
  - (22) 『老字号』 p. 327
  - (23) ①の場合、三合祥の名前が残っているし、そこで店員も働いているのだから、「終わり」ではな

いというふうには言えるかもしれないが、少なくともこの作品では、今までとは店の風格も変わり、しかも商売方法も全く違うのだから、実質的には三合祥ではないと考えてよいと思う。この段階での三合祥の「終わり」である。

- (24) 『断魂槍』 p. 328
  - (25) 『断魂槍』 同上
  - (26) 『断魂槍』 p. 329
  - (27) 『断魂槍』 p. 333
  - (28) 『断魂槍』 pp. 333-334
  - (29) 『断魂槍』 p. 334
  - (30) 『断魂槍』 pp. 334-335
  - (31) 『断魂槍』 p. 335
  - (32) 『断魂槍』 同上
  - (33) 井上靖の作品之中に「壺」（『中央公論』85-12・1970年12月・pp. 372-380）というものがある。この中に紹介されている老舎の話と、今回取り上げた『老字号』『断魂槍』の物語とが奇妙に似通っていると思われる。
- これは、老舎が1960年3月末に日本を訪れた際の、ある午餐後の談笑時、話したものである。「むかし中国に沢山の骨董の名器を持っている金持ちがあった。仕事に失敗し、次々に名器を手放していったが、その果てにとうとう物乞いにまで零落してしまった。しかし物乞いになっても一つの壺だけは手放さず、その壺を持って放浪した。それを知った別の金持ちが何とかしてその壺を手に入れたく想い、高い値段で買い取ろうとして何回も交渉したが、物乞いは決してそれに応じなかった。ところが何年か経って、物乞いは老いて歩行さえも難しくなった。金持ちはそうした物乞いに家を与え、食を給し、ひそかに相手が死ぬのを待った。やがては物乞いは老いの果てに病んで死んだ。金持ちは待ちに待った時が来たと思つて悦んだが、なんと相手は息を引き取る前に、その壺を庭に微

塵に砕いていた。」これが話の全部である。

この話に、井上氏は「壺に対する執心を取扱ったものか、人間の慾の深さをたしなめたものか、その点ははっきりしなかったが、いずれにしてもさして深い意味を持った話ではなく、その場限りの笑話として受け取っていいものであった。」という感想を抱いた。ところが、その時、広津和郎氏は老舎に向かって「わたしの国では、いい壺や皿だったら、決して割るようなことはしない。あすは城が落ち、自分も死ななければならぬと知ったら、自分の持っている名品名器を、たとえ敵であっても、相手方に渡していますよ。実際にそういう武将がありました。」という発言をしたのである。この言葉に老舎は「一瞬戸惑った表情を取った」と書かれている。

今回の『老字号』『断魂槍』に関する考察を以て考えれば、老舎の話の意図がよく分かるのではないか。実は、老舎の話は「深い意味」を持っているのである。ただ、もちろん「壺を壊す」かそれとも「壺を敵に渡す」かの選択で、どちらがより「壺を愛しているか」ということについては議論は尽きないだろう。しかし「壺を壊す」かそれとも「壺を敵に渡す」かでは「表現するもの」はかなり違うのではないか。別の機会に論じてみたい。

(34) 注(4)の論文参照。

(35) 老舎研究会雑誌に投稿中の「老舎『微神』と『月牙児』の「悲劇」」という文章の中でこのように述べた。

（付記）本稿は科学研究費補助金（基盤研究（C）「中国における家族の文学表象の形成と展開に関する基礎的研究」代表者西上勝）による研究成果の一部である。